

# 【特集】遊ぶ・知る・楽しむ アミューズメントワールドへのお誘い

この秋、あなたのお出かけスポットはどこですか。

今回、特集でのお薦めは、

徳島県内の博物館や美術館などのアミューズメントワールド。

遊ぶ・知る・楽しむ—をテーマに、

進化する展示やアソビごころ、

写真映えスポットなどをピックアップしてみました。

案内人はバックヤードを知り尽くす学芸員などの人たちです。



## 博物館と学芸員

「博物館」という存在は知っているけれど、それが具体的に何なのかを知らない方は意外と多いかもしれません。博物館法では「博物館」についてこう定めています。「『博物館』とは、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管（育成を含む。以下同じ。）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、併せてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関（後略）」です。

博物館という名が付かなくとも、美術館、資料館や科学館、さらには動物園・植物園・水族館のように生きている生物を扱う機関も博物館の概念に含まれます。

ただし、この概念に含まれていたら全てが博物館というわけではありません。博物館法には「登録を受けたものを博物館とする」という前提があり、都道府県教育委員会の審査を受けて登録された「登録博物館」と、それに相当する施設とされた「指定施設」、そして法では触れられていない「博物館類似施設」に分類されます。日本の「博物館」は、そのほとんどが法の適用外となる「博物館類似施設」であるという現状です。

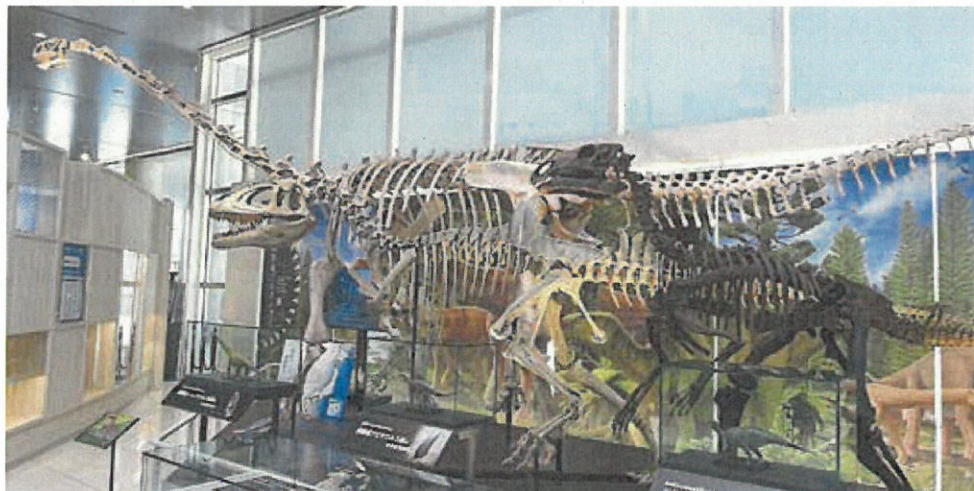
多岐にわたる分野の資料について、その収集・保管・展示、さらには調査研究と教育普及という博物館活動を担うのが「学芸員」です。学芸員の仕事には各分野の専門的な知識が必要になるだけでなく、博物館が人々に学びの場や楽しみの場を提供する機関となるための工夫も求められています。

（徳島県立博物館主任学芸員・小布施彰太）





# 徳島県立博物館



徳島の自然と歴史をテーマに、考古・歴史・民俗・美術工芸の人文科学と動物・植物・地学の自然科学の各分野をあわせた総合博物館。2021年に「徳島恐竜コレクション」コーナーを設けるなど全面リニューアルオープンした。中央の回廊を回って多彩な展示を自由に見ることができ、タッチパネル操作の楽しみもある。

## 世界に2体だけ！ 肉食恐竜コンカベナトールの骨格模型

主任学芸員(地学)・小布施彰太さん



新しくなった博物館の恐竜展示は大人にも子どもにも人気のスポットです。

中でも注目していただきたいのは背中の後方にこぶのような盛り上がりをもつ珍しい肉食恐竜・コンカベナトール。全長は約6mで、ほぼ全身が残った化石がスペインで発見されました。薄い石灰岩の化石を福井県立恐竜博物館が立体にした骨格模型は世界に2体だけ。その1体を「徳島恐竜コレクション」で常設展示をしています。

この他にも博物館が発掘調査を行っている徳島県勝浦町の恐竜化石などを多数展示しています。是非合わせてご覧ください。



コンカベナトールの骨格模型

## 103日間の遠洋漁業日誌

専門学芸員(民俗)・磯本宏紀さん



残された民具や日誌など、さまざまなものから、当時の暮らしや工夫を凝らした生活の知恵が伺え、博物館の展示品は深掘りするほど面白くなります。

例えば漁業。大正・昭和時代は遠洋漁業「以西底びき網漁業」の最盛期で、県南の漁師は九州から2隻1統の底びき網船で遠く東シナ海や黄海の大陸棚まで出かけていました。その様子を丹念に記録した航海日誌によると航海は103日間にも及び、漁獲高や天候などさまざまなことが読み取れ、県人と九州のつながりなども分かります。

各展示品が語る世相や生活、是非のぞいてみてください。



航海日誌と航路図







# 徳島県立博物館

## 楽しい吹き出し参動交代の絵巻

学芸係長(歴史)・松永友和さん

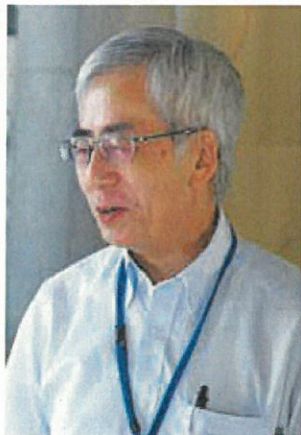


13代藩主蜂須賀齊裕が江戸から徳島に入る行列を描いた「みとものつら絵巻」。大名行列の先頭で毛槍を持つお供から二本差しの武士、殿様の籠を担ぐ者、殿様に付き従う江戸供家老等々。微細に描かれた総勢470名の表情豊かな人々の声が拾えたら...と、実物絵巻の前に吹き出しセリフ入り絵巻が楽しめるタッチパネルを設けています。

セリフの作者は博物館の職員全員。ランチタイムのテーブルに絵巻のコピーを広げ、それぞれが自由に書き入れたセリフを担当学芸員が精査してまとめたもの。マンガ感覚を味わっていただけたらうれしいです。

## デジタルで妖怪と遊ぶ

館長・長谷川賢二さん



三好市の妖怪、徳島市や小松島市のタヌキ伝説など妖怪と郷土の文化にはつながりがあります。そこで推したいのが、本館所蔵の「化ものの絵巻」(縦約28cm、横約4.6m)です。室町時代の「百鬼夜行絵巻」を模写した江戸時代のもの。絵巻全体が見られるようにデジタル映像化し、妖怪たちが四つのモニターの中で動き回る様子が映し出されます。来館した人たちはその場で撮影した自分の顔写真を妖怪の顔にはめ込んで遊べるようになっています。

地獄の沙汰も金次第、かどうかは分かりませんが、このコーナー近くには、藩札や古銭を収集したタンス預金のような隠れ展示もあります。見つけてみてください。

徳島県立博物館

〒770-8070

徳島市八万町向寺山(徳島県文化の森総合公園)

TEL 088-668-3636

【開館時間】午前9時30分～午後5時

【休館日】月曜日(祝日・振替休日のときは翌日)、年末年始(12月29日～1月4日)

【観覧料】

常設展Ⅱ 一般個人400円[3200円] / 高校・大学生2000円[1600円] / 小・中学生1000円[800円]

※Ⅱ内は団体(20名以上)等の場合。

なお、祝日・振替休日の常設展観覧料は無料。

企画展Ⅱ 企画展の観覧料はその都度別に定める。

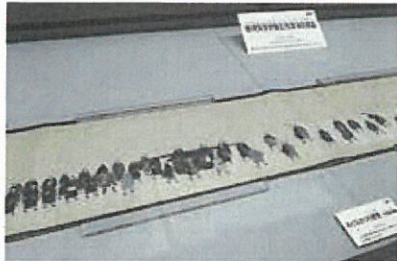
【高齢者・障がい者の観覧料割引】

・高齢者(65歳以上)Ⅱ 常設展観覧料が無料、企画展観覧料が半額(※要証明)・障がい者とその介助者1名Ⅱ 常設展・企画展とも観覧料が無料(※要証明)

【小・中学生、高校生の観覧料免除】

次の場合は、常設展、企画展とも小・中学生、高校生の観覧料は無料。

・教育課程に基づく学習活動として観覧するとき  
土曜日、日曜日および祝日に観覧するとき・春休み、夏休み、冬休み等長期休暇中に観覧するとき



みとものつら絵巻(下はタッチパネル)



古銭



「化もの絵巻」



タッチパネルと4つのモニター





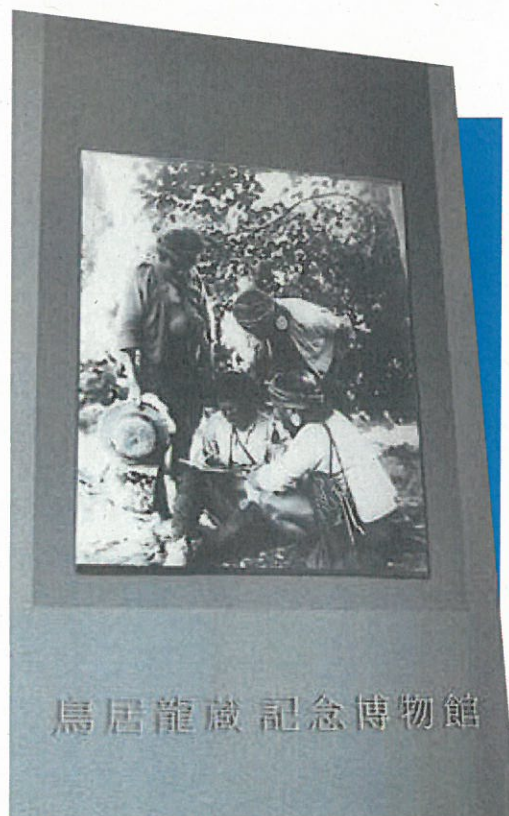


# 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館



鳥居龍蔵

徳島県文化の森総合公園（徳島市向寺山）内にある県立の博物館。徳島市東船場で生まれた人類学、民族学、考古学の研究者・鳥居龍蔵（1870～1953年）の業績を顕彰するため、2010年に鳴門市から現在地へ移転。より充実した展示内容で、鳥居龍蔵の旺盛な活動ぶりが身近に伝わる興味深い施設になっている。



鳥居龍蔵 記念博物館



展示室風景

アジアを駆け巡って調査をした世界的な人類学者で、フィールドにおける研究に生涯を捧げた鳥居龍蔵。実は、お隣の高知県出身の植物学者・牧野富太郎（1862～1957年）と同世代です。鳥居龍蔵も牧野富太郎も、小学校を中退し、独学でその道を究めた世界的な学者で、ともに東京大学理学部を研究拠点とし、相互に交流がありました。牧野富太郎と同様に、同じ四国出身の世界的な学者・鳥居龍蔵の研究や生涯には是非注目していただきたいです。



鳥居龍蔵と牧野富太郎  
学芸員・坂東泰さん

鳥居龍蔵は遼東半島の調査を皮切りに、台湾や西南中国、朝鮮半島、シベリアなど各地を精力的に調査し、後年には南米ペルーまで足を伸ばしています。鳥居は1896年から1911年にかけて、5回にわたり台湾で調査を行っており、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館では、2022年9月に国立台湾史前文化博物館と連携協定を締結。私たち博物館スタッフは台湾での鳥居龍蔵の足跡をたどりました。約100年前の貴重な鳥居の写真資料などを目にした現地の人々の感動ぶりは特に印象的でした。音源を録音する蠟管、写真撮影のためのガラス乾板など調査のために持参する機材の重量はガラス乾板だけでも数キログラムから数十キログラム。それでも、機会があればどこまでも調査に出かけ、執筆や講演にも熱心で、時代の空気を読むことにも長けていた鳥居龍蔵。改めて資料の価値を検証し、再評価につなげたいものです。



蠟管と蠟管蓄音機



機会があればどこまでも  
調査に出かけた鳥居龍蔵  
主任学芸員・小林篤正さん